

内面理解と指導技術の融合(2)

～作業学習「羊毛でスマホケースを作ろう」の授業の振り返り記録の検討から～

○若狭谷 知子

青山 新吾

（広島市立広島特別支援学校）

（ノートルダム清心女子大学人間生活学部）

KEY WORDS: 知的障害 不適切行動 リフレクション

（目的）

パニック、癇癪、自傷、他害等を目の前にすると、誰もが「何とかしてやりたい。」と心を痛める。青山（2012）は、「子どもと関わる方法だけに目を奪われないことである。子どもに何が伝わったのか？に鈍感であるべからずである。」という。様々な理論や指導技術も大事であるが、彼らの内面を理解することも必要不可欠である。本研究では、内面理解をして気持ちを通わせ、個に応じた指導技術を融合させることが、その子に合ったオーダーメイドの支援を行うこととなり、日々の生活のしやすさに繋がることについて考察する。

（方法）

対象 Rさん。特別支援学校中学部3年生、女子、知的障害。言葉での指示が概ね理解できる。思うようにならないと、教師を叩いたり、引っ掻いたり、髪の毛を引っ張ったり、唾をかけたりすることがある。

手続き Rさんについての記録は全部で18本ある。ここでは特に象徴的な記録20〇〇年10月の作業学習「羊毛でスマホケースを作ろう」の記録をもとに検討する。

本事例研究については、保護者に事例研究主旨と意義を伝え、研究および発表等に関する許可を得ている。

（結果） 振り返り記録

Rさんは落ち着いて教室に入って着席した。しかし始めの挨拶をした後、めあて決めになると、机に伏して寝だした。順番にめあてを聞き、Rさんには「今日のめあて、集中にしようね。」とさらっと言ってカードを見せて確認した。

準備を整えてから「Rさん、おまたせ。準備できたから始めるよ。」と声を掛けるとむっくり起き上がった。「今日はピンクやるよ。きれいでしょ。この色で頑張ろうね。」と言ってハイタッチをした。ぼんやりしている感じはあるが、素直に言うことを聞く。手袋を付けるのもスムーズだった。

調子よく始めたのだが、この日は羊毛を固めるための石鹼水の石鹼の分量が間違っていたため、羊毛がうまくシート状にまとまらなかった。「おかしいねえ。」と言いながら、うまく付くようにするため、いつもの手の動きと違う動きをして、羊毛をうまく付けようとした。するとRさんは、いつもの手の動きと違ったことに違和感を感じたのか、私の手を引っ掻いた。「引っ掻くのはおかしいよ。ばつ。」と言って指で×を作っておかしいことを伝えた。そしてすぐに、石鹼水の石鹼の分量を調整して、再びやり直すと、机を2回蹴った。しかし、ここでは無視して仕事に集中して続けるようにした。すると仕事モードに入り、その後はずっとギュッギュッと羊毛を見ながら押さえた。

Rさんは、蹴り、唾かけ、髪の毛ひっぱり・・・など、いたずらの方法がいびつぎるために、彼女のことを障害の重い子のイメージをもってしまいが、そうではないのではないか。実は、いろんなことがよく分かるし、やろうとするし、できる子なのではないか。それが、今までの生活の中で、変ないたずらを身に付けてしまっているの、半分ぐらいは反射的に出てきてしまうのではないかと思った。

前半が終わり、5分休憩になったので、手を洗いに行った。そこで、「Rさん、おかしいことしなくても、先生ちや

んとRさんのこと信用してるよ。」と言った。Rさんは、洗っていた手を止めて固まって、何かを思っているのか、ぼうっとしていた。「おかしいことしなくても、いろんなことできるようになるし、成長できるからね。」と話すと、その間中ずっと瞬きもせずに固まっていた。しばらくすると、ぼんやりしたまま手を洗い、蛇口を止め、教室に戻ろうとしたので、「Rさんは、お利口やよ。」と言って教室に入った。後半は、すんなり手袋を付け、もくもくとやった。

（考察）

Rさんは、不適切行動を多く身に付けてしまった生徒である。しかし、最初からではないだろう。身に付けてしまった原因の一つは、彼女の内面を理解しようとした支援が少なかったことにあるのではないだろうか。Rさんの内面とのずれが積み積み重ねるごとに、不適切な行動が増えていってしまったのではないだろうか。

この記録では、Rさんは実はいろいろなことがよく分かっている、もっと自分のことを認めて欲しいと思っているのではないかと内面を探り、言葉掛けをしている。そして、それを聞くRさんは瞬きもせずに聞いて固まっていた。彼女がどう思ったのかまでは分からないが、自分の気持ちを一生懸命に考えてくれているということは伝わったに違いない。休憩後の後半は、不適切な行動は全く出なかったのだから。Rさんの不適切行動を、単純に障害のせいと決めつけずに、どのような内面からくるのかを、その行動の前後から探り、その気持ちを受け止めたかかわりをしていく必要がある。それが、一つずつ積み重ねられるごとに、不適切行動も減っていくのではないかと考える。

同時に、指導技術を使つての支援も大切である。ここでは、4つの指導技術を使っている。①めあての確認が始まると机に伏して寝だしたRさんを「流し」ている。これは、「私を見て。」のアピールと思われる。Rさんはかかわって欲しいという気持ちを強くもっているが、その表現方法が逆になってしまいがちで、ここにかかわり始めると困った行動になると予想された。もし、うまく受け入れてかかわれたとしても今度は「終わり」の切り替えがうまくできずにこじれてしまう可能性がある。従って、めあての確認だけはカードでさらっと言ひ、寝ていることについては、「流し」てRさんの気持ちをコントロールしている。②きれいな色が好きということを知っていたので、いきなり「作業、やるよ。」ではなく、「きれいだねえ。」と同じものを見て「共感」して、Rさんと気持ちを通わせながらモチベーションを上げている。そして、きれいな色の羊毛で素敵な製品を「一緒に」頑張って作ろうねとハイタッチしている。③ここは注意した方がよいと感じたときに、「ばつ。」と言って「短くきっぱり注意」して伝えている。④机を2回蹴ったときには、「無視」して仕事に集中させたことである。

内面の想像推察は様々である。しかし、子どもの動きや表情から、何が伝わったのか？に敏感になるべきである。

今後の研究としては、内面理解と指導技術の融合について、その具体的な在り方と意味の探求を目指していきたい。

（文献）○青山新吾（2012）『個別の指導における子どもとの関係づくり』（WAKASAYA Tomoko, AOYAMA Shingo）